

ボランティア体験型講義による 学生の自主的活動意識の醸成 —山口大学講義「ボランティアと自主活動」をもとに—

辻 多 聞

要旨

山口大学においてボランティア体験型講義「ボランティアと自主活動」を実施したところ、以下の3つの知見が得られた。1つ目は、ボランティア体験型講義は学生が望む大学教育の一つであるということ、2つ目は、多くの受講学生が今後の大学生活において自主的活動に参加しようという意識を持ったこと、そして3つ目は、学生の自主的活動意識の醸成に効果があるだろうということである。社会人基礎力の向上が求められる大学教育において、ボランティア体験型講義の開設や拡充を検討する意義は十分にあるだろう。

キーワード

学生、ボランティア体験型講義、自主的活動、社会人基礎力、大学教育

1 はじめに

学生はボランティア活動へ参加することにより、現実社会の課題を知るきっかけを得る。これは自身の視野を広げることとなり、そして今後の自分の生き方を切り開く力へと変わっていくはずである。自分の生き方を切り開く力は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として経済産業省が提唱している社会人基礎力（経済産業省、2006）と言ってもよいだろう。文部科学省（2002）は、ボランティア活動を、従来の「官」と「民」という二分法では捉えきれない新たな公共のための活動とも言うべきものとして評価し、社会全体として推進する必要がある、としている。この文部科学省による発表を受けて全国の大学においてボランティアセンターの設立やボランティアに関連した講義が開講されてきた。

今後、大学において学生に対してボランティア活動をより一層推進していく上で、ボラ

ンティア活動への参加が社会人基礎力の育成に対してどれくらいの効果があるのかを検証していくことは非常に重要であると言える。武田（2009）によると、ボランティア教育履修学生の約八割が「何か得るものがあつた」と回答している。また宋（2003）は、ボランティア教育により良い意味での学生の変容が見られたと述べている。しかし松瀬（2009）の、「学生の学び」「地域への貢献」の達成度を、何を目標にどう検証するかという評価軸の設定はまだ試行錯誤の段階にある、に見られるように、ボランティア活動による社会人基礎力への効果をとらえることは非常に困難である。なぜならば社会人基礎力とは複雑多岐な定性的なものであるために、正確に定量化することができないからである。また学生がボランティア活動に参加する前と後での変化を捉えなければならず、学生の追跡調査の実施が困難であることも、ボランティア活動と社会人基礎力の向上との間における関係を明らかにすることを困難にする一因としてあ

げられる。

本研究では、山口大学におけるボランティア体験型講義を受講した学生自身の感想から、ボランティア活動への参加が社会人基礎力に及ぼす効果について考察を行った。また社会人基礎力の変化を自主的活動意識の変化に限定し、受講後に行われた課外活動に関する大学教育プログラムへの受講生の参加状況の調査を行った。

2 ボランティア体験型講義の開設経緯

1996年に広中平祐氏が山口大学の学長に就任し、「学生が主体となる大学」を目指して山口大学の改革が推し進められた。この改革における理念の根幹は、大学は研究拠点というだけでなく学生の人格形成を行う教育拠点でもなければならないということである（文部科学省，2000）。すなわち大学では学生の主体性や自主性の向上させる様々な教育的取組を行っていかなければならない。この流れを受けて山口大学大学教育機構では、2005年度に学生ボランティア活動支援等検討ワーキンググループを立ち上げ、学生の主体性や自主性が培われるような大学としてのボランティア支援方法について検討を行った（辰巳ら，2006）。その検討結果の1つとして、学内にボランティアに関する情報交換や調整を行う空間（ボランティアルーム）の開設が必要であることがあげられた。これを受けて2006年度より学内外に対するボランティア情報窓口として「山口大学学生自主活動ルーム」が設立されている（辻，2010）。またその他の検討結果として、学生のボランティア活動に対する知識を深める必要があること、また活動を正課の単位として認定することもあげられた。この両者を統合したものとして、2006年度よりボランティア体験を組み込んだ講義「地域と出会う」（2008年度より「ボランティアと自主活動」と改名）が低学年向けのものとし

て共通教育において開設された。低学年向けとしたのは、この講義を発端に受講生たちの主体性や自主性が以降の大学生活においてさらに開花すること、またその影響が他の学生に及ぶこと、すなわち「学生が主体となる大学」を期待しているからである。

3 講義「ボランティアと自主活動」

3.1 講義の目標

本講義の学生の到達目標としては、以下の4つを提示した。

- ・ ボランティアや自主活動に関する基本的意義や内容を理解する
- ・ コミュニケーション能力（特に社会人との）を向上させる
- ・ 経験したことを体系的に捉え、自分の力と変える
- ・ 自分の経験や思いを人にわかりやすく伝える

1番目の目標は社会人基礎力の源となる専門知識に通じるものである。2番目と4番目は社会人基礎力における「チームで働く力」に、3番目は「考え抜く力」に通じている。また目標として明記してはいないが、本講義はボランティア体験が含まれていることから、社会人基礎力における「前に踏み出す力」は自ずと必要となる。以上のように本講義の目標設定は社会人基礎力の向上を大きく意識したものとした。

3.2 講義の構成

講義は大きく分けて座学、体験、報告会の3つのパートで構成した。

- ・ 座学パート

講義の前半に該当するパートである。ここでは、ボランティア活動や自主活動に関する基礎知識を学ぶとともに、自主活動に伴う自己啓発効果、そしてボランティアに行くに際してのマナーや注意事項を学ぶ。

- ・ 体験パート

講義の後半に該当するパートである。学生は各自体験先として割り当てられた団体と連絡をとり、2ヶ月間の期間内に20時間のボランティア体験を行う。またふりかえりシート（下記参照）に記入することで、体験したことを自分の力とかえるPDCA（Plan- Do- Check- Action）サイクルを経験する。

- ・ 報告会パート

講義の最終に該当するパートである。学生が各自5分間の時間を使い、自らの経験や学びを他の受講生に対して報告する。他者の学びを知ることにより、自身の経験や学びをもう一度ふりかえる。多人数を前にした発表の経験をする事と、これからの大学生活への目標を再設定することを狙いとしている。

3.3 集団面談会

この講義の1つの特徴と言えるものである。体験先団体ごとにブースを設け、学生はそのブースを訪問して、体験内容に関する説明を受けるといものである。合同就職説明会をヒントにしている（参照、図1、写真1）。各ブースの聴講学生数は5名以下であるため、自身の抱いた質問を恥ずかしがることなく体験先に尋ねることができる。このように少人数で直接的に体験団体と交流することで、自身の希望体験先を明確にすることが出来るとともに、コミュニケーション能力の向上が期待できる。また直接的な交流を持つことで講義とは関係ない状態で、その団体への活動に自主的に参加していく可能性も、この集団面談会は含んでいる。

3.4 ふりかえりシート

受講生に対して図2と図3のようなふりかえりシートを配布した。ふりかえりシートは大きく2部で構成されている。第1部は、ボランティア体験全体を通しての経験と学びを記入するものである。第2部は、体験1日を

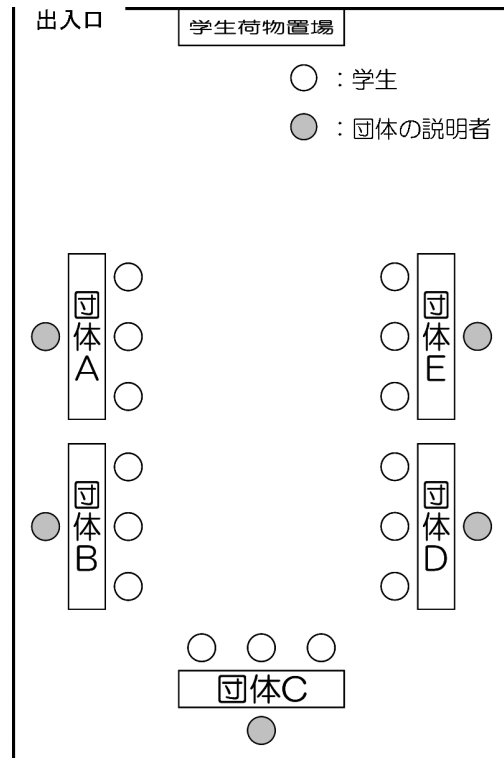


図1 集団面談会の会場概要図



写真1 集団面談会でのブースの様子

通してのものである。第1部の記入項目は、体験先に対する印象、体験への期待（体験に対する目標設定）、体験に対する不安、活動記録概要、体験全体での最も印象に残っている出来事、体験を通じての学び、そして最後に今後の私の大学生活（大学生活に対する目標設定）とした。第2部の記入項目は、本日の目標、当日の活動記録概要、当日の最も印象

ボランティアと自主活動		ボランティアと自主活動	
ボランティア体験記録用紙①		ボランティア体験活動記録	
学籍番号	学 年	月 日	活動概要
□□□□□□□□□□	□□□□□□□□□□	月 日	h
学部	学科・課程	月 日	h
		月 日	h
		月 日	h
		月 日	h
		月 日	h
ボランティア体験先団体名			
体験先に対する印象			
① 上記より私が感じること			
② 上記より私が感じること			
③ 上記より私が感じること			
体験への期待（体験から学びたいこと、成長したいことなど）			
体験に対する不安			
もっとも印象に残っている出来事について <small>出来事</small>			
<small>上記出来事に対する他者の声</small>			
<small>上記より感じ得る自身の感想</small>			
体験を通して学んだこと、成長したこと			
今後の私の大学生活			
			氏名

国立大学法人 山ロ大学

記録用紙① (1/2)

国立大学法人 山ロ大学

記録用紙① (2/2)

※原寸はA4版2ページ

図2 ふりかえりシート①（第1部ボランティア体験全体を通しての経験と学び）

ボランティアと自主活動

ボランティア体験記録用紙②

本日の目標

月	日の活動記録	活動概要
	① 時～時	
	② 時～時	
	③ 時～時	
	④ 時～時	
	⑤ 時～時	
	⑥ 時～時	
	⑦ 時～時	
	⑧ 時～時	
	⑨ 時～時	
	⑩ 時～時	

本日のもっとも印象に残っている出来事について
印採手

上記出来事に対する相手の声

上記の関する自身の感想

ボランティアと自主活動

本日の体験を通しての感想や学びなど

次回参加に対する目標（最終日は記入の必要なし）

体験先に対する提案事項

体験先責任者所見欄

認印

国立大学法人 山梨大学

国立大学法人 山梨大学

※原寸はA4版2ページ

図3 ふりかえりシート②（第2部ボランティア体験1日を通しての経験と学び）

に残っている出来事，当日の体験を通しての感想，次回参加に対する目標，そして体験先に対する提案事項とした。シートへの記入項目は，ともにPDCAサイクルを意識して設定している。第1部は報告会パートの資料として全受講生分をとりまとめ，それを全受講者に対して配布した。第2部は記入する都度体験先対応者に提出して，対応者から所見と確認印をもらうよう指示した。

4 受講生の感想

4.1 学生の授業評価結果

山口大学では1999年度後期よりすべての共通教育講義に対して学生による授業評価を行っている。回答方法は，そう思う，ややそう思う，どちらとも言えない，余りそう思わない，そう思わない，の五者択一式である。ここでは2007年度と2008年度での回答結果を紹介する。この2年間における受講生状況は表1のとおりである。2008年度において2年生が2名受講して

表1 2007年度および2008年度におけるボランティア体験講義の受講生状況

学部	2007年度		2008年度	
	男	女	男	女
2年	0	0	2	0
人文	1	6	1	1
教育	0	3	2	7
経済	4	9	2	4
理	0	0	1	0
工	0	0	6	1
医	1	0	0	0
農	0	1	0	0
計	6	19	14	13

(単位：人)

いるが，それ以外はすべて1年生であった。また両年度をあわせると全学部から受講生がいたことになる。

表2は，「あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか」に対する回答結果である。この設問は，ボランティア体験講義受講生による目標達成による自己評価に該当する。肯定的回答（そう思う，ややそう思うの合計）をしたものは，2007年度，2008年度それぞれにおいて，19人（79%），22人（92%）であり，肯定的回答に対して高い結果が得られた。

表3は，「あなたは授業の内容を理解しましたか」に対する回答結果である。この設問は，ボランティア体験講義受講生による講義理解に関する自己評価に該当する。肯定的回答をしたものは，2007年度，2008年度それぞれにおいて，22人（92%），23人（96%）となり，こちらも非常に高い結

表2 「あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか」に対する回答結果

年度	回答数	そう	やや	どちらとも	余りそう	そう	無回答
		思う	そう思う	言えない	思わない	思わない	
2007	24	7	12	4	0	1	0
2008	24	10	12	0	0	0	2

(単位：人)

表3 「あなたは授業の内容を理解しましたか」に対する回答結果

年度	回答数	そう	やや	どちらとも	余りそう	そう	無回答
		思う	そう思う	言えない	思わない	思わない	
2007	24	13	9	1	1	0	0
2008	24	16	7	1	0	0	0

(単位：人)

表4 「この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか」に対する回答結果

年度	回答数	はい	やや	どちらとも	はい	はい	無回答
		思う	そう思う	言えない	思わない	思わない	
2007	24	16	7	0	1	0	0
2008	24	20	3	0	1	0	0

(単位：人)

果が得られた。また先の目標達成の自己評価と異なり、肯定的回答の中でも、そう思うと回答した学生数のほうが、ややそう思うと回答した学生数よりもいずれの年度においても多くなった。

表4は、「この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか」に対する回答結果である。この設問は、ボランティア体験型講義受講生による講義に対する満足度に該当する。肯定的回答をしたものは両年度とも23人(96%)であり、この設問に関しても非常に高い結果が得られた。

以上をまとめると、ボランティア体験型講義は、学生自身として自主的活動意識やコミュニケーション能力の向上が認識出来、また講義として満足できるものであると言えるだろう。つまり、ボランティア体験型講義は学生が望む大学教育の1つであると言えるだろう。

4.2 講義終了時の受講生の感想文

講義の最終日に自由記述式の感想等を受講生に記入させた。本編末の付録1, 2は2007年度と2008年度の受講生が記入したものである。この中のいくつかの文章をもとにして学生の学びについて考察を行う。

① 「人のため」や「無償で」など気を張っ

てやる必要なんてなく自分が気になる問題を解決することが、人のため、ボランティアにつながるのだろう。自ら、自主的に行動すれば、多くのものを得られるのだと知った。

(2007年度受講生)

学生は、自発性の重要性を学んだことがこの文章からよく分かる。またその自発性が福祉性につながっていくことも体験を通して実感できたのだろうということが窺える。自発性や福祉性はボランティアの根幹(小倉ら, 2001)であり、この講義を通して学生は講義の目標の1つであるボランティアや自主活動に関する基本的意義を、実感し、学んだであろうことが予想される。

② コミュニケーションは「あいさつ」から始まると思った。笑顔で接しながら、身ぶり手ぶりで話すと、さらに仲良くなれると思った。

(2008年度受講生)

コミュニケーションの1つの手法を自分なりに見出していることがこの文章から読み取ることができる。

③ この講義から、人とふれあうことの大切さを学びました。知らない人とたくさん話してみても、人とのふれあいは大切であり、またふれあってみないと楽しさが分からないことに気付きました。

(2007年度受講生)

この文章からは、コミュニケーションの意義を体験より実感し、そして学んでいったことがよくわかる。②と③の文章から、この講義の目標であるコミュニケーション能力の向上に関して学生が意識していたことがくみ取れる。

④何をするにも、なぜするのかというのを考えてから行動をした方が、飲み込みが早いし、意欲もわく。ふり返って考えることがないと、何かをしたという事実だけが残り、意味のない悲しいものになってしまう。やるからには本気でやり、反省をして、次の目標を作り、これからにつなげていく。このサイクルが大切だと思った。

(2007年度受講生)

経験はそれだけでは事実しか残らないということ、すなわちこの講義の目標である経験を体系的にとらえ自分の力とすることを、この学生は理解したようである。

以上より感想文からも前節に示した講義の目標を達成しているであろうことが窺える。講義の目標は先に示したように社会人基礎力の向上を考慮している。学生はこの講義を通して、自分は人間的にいくらか成長したと実感しているにちがいない。客観的視点で言い換えるならば、受講生の社会人基礎力が向上していることが予想される。社会人基礎力の向上は、自主的活動の意識の向上にもつながっていくはずである。

⑤少しだけでも自ら進んで動けば、人のためにもなるが、自分も成長できると思った。自分が気付かないところにもできることはあるので、積極的に行動したい。

(2008年度受講生)

⑥新しいことにチャレンジすれば何か貴重な体験をすることができることが学べた。

(2008年度受講生)

⑤の文章における「積極」、⑥の文章における「チャレンジ(挑戦)」という言葉、もしくはこうした意味合いを含んだ文章は、両年度の文章の中にいくつも見ることが出来る。これらは正に自主的活動意識の向上

を表しているものである。ボランティア体験型講義は、学生の自主的活動意識を醸成させることに対して、ある程度の効果があることが予想される。

5 自主的活動への参加状況

⑦この講義を通じてボランティア体験先とは別のボランティアに出会うことができ、今なお参加させていただいている。これこそが自主活動だと思い、この「ボランティアと自主活動」は、その1歩踏み出すことに勇気を与えてくれる講義だと思った。

(2008年度受講生)

この文章に見られるように、ボランティア体験型講義がきっかけとなって受講生がボランティア活動や自主的活動に参加するようになっている。「山口大学自主活動ルーム」へも受講生が多く訪れ、ボランティア情報を取得してその活動に参加している。

山口大学の特色ある教育活動の1つとして「山口大学おもしろプロジェクト」という自主的活動を支援するプログラムがある。これは、学生による自由な企画を募集し、その実行資金を最大50万円まで支援するものである(辻, 2009)。表5は、その「山口大学おもしろプロジェクト」に企画を提出してきた団体の構成員の中に、どれくらい「ボランティアと自主活動」を受講した学生がいるかを調査した結果である。最下段の括弧内の数字は、構成員入学年度の項目に関しては、山口大学(2010)に基づくその年度の全学生数を、また構成員中の受講者学生の項目に関しては、その年度での受講者人数を表している。募集年度の申請件数当たりの構成員数を比較すると、2008年度は6.4人、2009年度は5.4人であることに対して、2010年度は11.8人と非常に高い。これは申請書式が2010年度より変更

このようにボランティア体験型講義は、学生のニーズ、そして社会人基礎力の育成を大学に望んでいるという社会のニーズにも応えている望ましい大学教育の1つの形であるだろう。

しかしボランティア体験型講義である「ボランティアと自主活動」を実施するうえで大きな問題が2つ生じた。1つ目は受講学生数の制限である。受講学生はすべてどこかのボランティア団体にて体験を行わなくてはならない。一方で1つの団体当たりにおいて受け入れをお願いできるのは多くても5人程度である。学生は体験期間中、各自連絡をとりボランティア団体に向かうことから、その団体の所在地は、比較的安全と思われる交通手段である徒歩もしくは自転車で通える場所になくてはならない。結果として山口市のような小規模の町では受け入れをお願いするボランティア団体数がかかなり限定されてしまう。つまり「ボランティアと自主活動」には履修制限をかけざるを得ないわけである。もう1つの問題は、ボランティア体験中は教員の目が学生にまったく届かない、言い換えるならば学生に対する教育的管理が十分にできないことである。学生の中には体験期間に入って勝手に履修をやめてしまった者がいた。ボランティア団体より学生が来ていない連絡を受けてはじめてその事実が発覚した。またふりかえりシートを全く書かずに、担当者の認印をもらう学生もいた。こうした2つの大きな問題に加えて、その他小さな問題も生じた。こうした問題点に対する対策方法を考えていくことが、今後ボランティア体験型講義を大学にて拡充していくためには必要である。

(学生支援センター・講師)

【参考文献】

- 小倉常明・松藤和生, 2001, KT 式新説ボランティア概論—ボランティア・その定義と調整—, エイデル研究所, p71
- 経済産業省, 2006, 「社会人基礎力に関する研究会」中間とりまとめ
- 宋正誼, 2003, 学生の地域体験とボランティア教育, 大学生とボランティアに関する実証的研究, ミネルヴァ書房, 323-354
- 武田直樹, 2009, 「つくば市をキャンパスにした社会力育成教育」の取り組み, 平成 20 年度学生ボランティア活動支援・促進の集い報告書, 独立行政法人日本学生支援機構, 18-22
- 辰巳佳寿子・吉田香奈・門脇 薫・辻 多聞, 2006, 学生の「ボランティア」に関する意識と大学の支援体制—山口大学の現状と課題—, 大学教育, 3, 209-219
- 辻 多聞, 2009, おもしろプロジェクトによる学びの成果と今後の課題, 大学教育, 6, 61-72
- 辻 多聞, 2010, 学生の自主的な活動支援部署の設立時の考慮事項, 大学教育, 7, 47-56
- 松瀬房子, 2009, 大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望—教育の新しい動向とコーディネーターの役割, 平成 20 年度学生ボランティア活動支援・促進の集い報告書, 独立行政法人日本学生支援機構, 23-26
- 文部科学省, 2000, 大学における学生生活の充実方策について(報告)—学生の立場に立った大学づくりを目指して—
- 文部科学省, 2002, 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について
- 山口大学, 2010, 山口大学要覧 2010

- この講義を受講して、「今」という時間の大切さに気付きました。「大学生」という立場でいられる4年間、遊んでばかりでは、もったいない、「大学生」としてこの「山口」でできることをやっつけていこう、という気持ちになりました。
- 子供の頃は、地域の人々とふれあったり、遊んだりすることが当たり前で、登下校時には知らない人とも笑顔であいさつをしたりしたことを思い出せました。昔の自分を思いだして、積極的に人々と関わっていくことができたらいいなと思います。
- 多くの人々がボランティアに参加したくてもきっかけがなかったり、勇気がもてなかったりといった、あと1歩の所で踏み止まっていると思うので、私自身がこの経験を生かし、友達など、身近な人を誘い、このようなボランティア活動に参加したいと思います。
- 自分から行動できるようになったか言われたら、まだ自信をもって Yes!とは言えない。でも、同じ思いをもった仲間がいることや、やろうと思ったときどうしたらよいかを学んだ。ここから何がしたいのか、何が今後できるのか、できるところまで挑戦していきたい。
- 「人のため」や「無償で」など気を張ってやる必要なんてなく自分が気になる問題を解決することが、人のため、ボランティアにつながるのだろう。自ら、自主的に行動すれば、多くのものを得られるのだと知った。
- 久しぶりのボランティアだったけど、ボランティアをした後に味わえる気持ちの良さと、やりとげた感が私はすごく好きで、それをまた味わうことができました。
- ボランティアに対する意識は大きく変わりました。時間があるから、まわりから良く見られるから、特別な活動…と書いていたのですが、この講義を終えた今は、誰でもすることができ、想像以上にやりがいのある楽しいことだと思います。
- ボランティアをしたことあるというのが当たり前な世の中になればいいなと思いました。
- ボランティアは「してあげる」という気持ちじゃなくて、「したい」という自分の意思で、するものだということが学べました。
- 学んだことを体験により実践することの大切さに気付きました。大学で学んだことをそこで終わらせるのではなく、体験を通してさらなる（統計学の講義で学んだことを活かして自分の興味のあることに関しての統計を出してみるなど）学びにつなげていこうと思いました。
- 何をするにも、なぜするのかというのを考えてから行動をした方が、飲み込みが早いし、意欲もわく。ふり返って考えることがないと、何かをしたという事実だけが残り、意味のない悲しいものになってしまう。やるからには本気でやり、反省をして、次の目標を作り、これからにつなげていく。このサイクルが大切だと思った。
- この講義から、人とふれあうことの大切さを学びました。知らない人とたくさん話してみて、人とのふれあいは大切であり、またふれあってみないと楽しさが分からないことに気付きました。

付録1 2007年度受講生による受講後の感想

- 私はこのボランティア体験を通して、人のあたたかさを感じました。今までは、ボランティアというと、大がかりな感じがして、なかなかできそうにないと思っていました。でも、今は、ボランティアはちょっとしたことでもいいのだと思うようになりました。
- 客観的に自分のことを見られるようになったような気がします。
- 少しだけでも自ら進んで動けば、人のためにもなるが、自分も成長できると思った。自分が気付かないところにもできることはあるので、積極的に行動したい。
- 私は自分から動き出すという勇気が今まであまりもてませんでした。少しはもてるようになったと思います。
- 体験に行く前の講義では、ボランティアとは何か、という問題や、マナーについて学び、すごく自分のためになりました。実際体験に行ってみて、講義で学んだことと本当につながっているなあと感じました。知らない人ばかりで不安だけでしたが、同じ体験先に行き話をしてもらうことによって、かけがえのない仲間ができたと思います。
- “責任をもつ”ということについて知ることができたというのが大きいです。社会人として生きていく上で、最も重要なものであるというように感じました。又、逃げるだけでなく、挑戦してみることも大切であるということも知りました。
- 勉強というかたいものではなく、マナーやあいさつなど自分にとって将来プラスになることをたくさん学べたと思う。
- 体験先にてボランティア活動（体験）を始めた時は、緊張もしましたが、「百聞は一見にしかず」で、実際に活動を見て、行って、感じると、聞いていたことよりも多くのことを学ぶことができたと思います。
- コミュニケーションは「あいさつ」から始まると思った。笑顔で接しながら、身ぶり手ぶりで話すと、さらに仲良くなれると思った。
- 何か身の周りで見つけて小さな事でも行えるようにしていきたいです。
- 新しいことにチャレンジすれば何か貴重な体験をすることができることを学べた。
- ボランティアは素晴らしいこと。やろうと思う気持ちが大切だと思った。人とのふれあいを通してまた1つ人間として大きくなりました。
- 今回のボランティア体験をすることによって、毎日行っていた部活にはほとんど行けなかったのが、何かをするには何かを犠牲にしなければならないことが分かりました。
- （この講義を通じて）ボランティア体験先とは別のボランティアに出会うことができ、今なお参加させていただいている。これこそが自主活動だと思い、この「ボランティアと自主活動」は、その1歩踏み出すことに勇気を与えてくれる講義だと思った。

付録2 2008年度受講生による受講後の感想